

## 言語遅滞児の微弱な要求行動の分析

藤原義博\*

(昭和62年10月30日受理)

### 要 旨

本研究では、明確な要求行動を早期に形成するための手掛かりを得ることを目的に、要求表現に乏しく、ことばに重篤な遅れを示す3名の遅滞児を対象に、対象児が好む要求対象物を手の届かない棚の上にならべて置くという「自己充足困難事態」において、彼らの示す微弱な欲求・要求行動の反応型について分析を行った。

結果は、全ての被験児において「対象物への注視」と「人への注視」が同様に高頻度で観察され、これらの一連の行動は機能的に見て要求行動か、あるいはその萌芽的行動と見なされた。その他、手差し、ハンドリング、クレーン行動といった要求行動が確認されたが、いずれも安定したものではなく、各被験児とも、確実に他者の注意を喚起し要求対象物を特定化できるような明瞭な反応型は未確立の状態にあることが示された。

これらの結果から、欲求・要求表現が微弱で不確実な遅滞児にあっては、対象物と人への一連の注視行動といった消極的で間接的な反応型が主要な要求表現であることが示唆された。また、これらの遅滞児であっても、実際にはかなりはっきりとした欲求を持っている可能性が示唆された。そして、充足者が遅滞児の対象物への注視や人への注視に留意し、即時に対応することが、要求行動を獲得させるための重要なステップであることが推察された。

### KEY WORDS

mand	要求行動	functional language skill	機能的言語技能
gazing behavior	注視行動	language-delayed children	言語遅滞児

### 問題と目的

模倣も困難なことばのない重度の遅滞児においては、いわゆる音声言語行動を形成することは容易ではなく、そのためにはまず意味のない発声や身振り・動作を含む非音声行動を早期に伝達行動として機能化することが必要だと思われる。中でも、自己の欲求を他者に伝えるという要求行動は、伝達することによって自己の欲求が満たされ強化される伝達行動であって、この要求行動の確立は日常生活の中で伝達行動そのものを動機づける可能性を持つと思われる。しかし、要求行動は「直接自己の欲求に基づく行動」(Winokur, 1976)<sup>(5)</sup>であって、欲求がある限りその伝達意図の強さや明確さはともかく、かなり重度の遅滞児であっても何等かの欲求・要求表現がなされていると思われる。

---

\* 障害児教育講座

これに関連して高杉(1985)<sup>(4)</sup>は、障害児の行動様式について、障害が重かったり重複している場合には健常者と同様の行動は見つけにくくなるとし、その理由として、第一に、その行動の表出があまりにも微弱であるために目だたないこと、第二に、反応ないし対応行動がわれわれと表面的に異なった行動種である場合があることを挙げている。

また、Berger & Cunningham (1983)<sup>(1)</sup>が、遅滞児の反応性の乏しき、弱さ、不規則性が母親のキャッチ(catch)を低下させると指摘しているように、仮に要求行動があっても、微弱なそして不規則な反応では、まわりの人が気付かないか、あるいは的確に対応することが困難であると推察される。これについて藤原ら(1985)<sup>(6)</sup>が行った重篤なことばの遅れを呈した遅滞児の欲求・要求行動の観察では、床を踏みならし奇声を上げるといった強化の遅延によるフラストレーション行動と、要求物を受け取る前にその場を離れてしまうといった強化が無効になる事態が見られ、また、言語発達レベルの低い遅滞児にこうした傾向が見出されている。

そして高杉(1985)<sup>(4)</sup>は、このような子どもの外界への積極的・選択的・意図的行動こそ、概念行動の芽生えとして重要なものであり、これらのかすかな行動を見つけ出し、より拡大し、より状況操作的に高めて行く事が指導の始まりであると述べている。

このように、ことばのない重度の遅滞児のより確実な要求行動の早期確立のためには、具体的な対応や指導を行うまえに、特に彼らの微弱な欲求・要求表現について、その反応型の詳細な分析を行い、指導の手掛かりを得ることが必要であると思われる。

本研究では、ことばがなく要求表現にも乏しい遅滞児を対象に、欲求対象を自己充足出来ないかあるいは充足することが困難な状況(藤原, 1985)<sup>(2)</sup>である「自己充足困難事態」を設定し、彼らの示す欲求・要求行動の反応型について分析を行い、より確実で明確な要求行動の確立のための手掛かりについて検討する。

## 方 法

### 対象児

ことばがないか、あってもその機能的使用および語い数が極めて少なく、また、日常中の要求行動も少なく、その様式も一定していない遅滞児3名を観察した。

各対象児の発達検査の結果および母親から聴取した日常での要求行動は、表1の通りであった。

### 観察場面

図1のように設定された部屋(8m×5.5m)に、4～6種類の各対象児が好む菓子、絵本、パズルを手の届かない棚の上に並べて置くという「自己充足困難事態」において観察を行った。

この事態は、先に筆者ら(藤原, 1985<sup>(2)</sup>; 藤原・加藤, 1985<sup>(3)</sup>)が遅滞児の要求言語行動について分析を行ったものと同様のものであり、欲求・要求行動がかなり安定した高い生起確率で見られることが確認されている。

なお、同室で、手の届く棚に同様の対象物を置いた自己充足

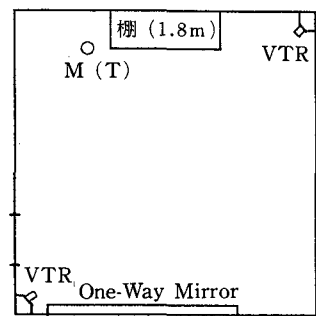


図1 観察場面

表1 対象児の発達検査結果および日常場面における要求行動

対象児	性別	年齢	津守式乳幼児発達検査					日常場面での要求行動
			運動	探索	社会	生活	言語	
M児	女	6:0	1:0	0:6	0:6	1:3	0:10	ことばはなく、明らかな要求行動は少なく、要求頻度も少ない。
S児	男	5:11	6:0	3:0	3:0	4:0	3:0	いくつかの単語を有し、要求時に1語文で要求出来るものもあるが、要求頻度は少ない。
I児	女	6:1	2:0	1:6	1:9	1:9	1:0	いくつかの単語を有するが、機能的使用は困難。明らかな要求行動は少なく、時にハンドリングが見られる。

可能事態による予備観察を2セッション行った後に、実験観察を行った。

### 観察方法

各対象児を母親あるいは対象児がよく慣れている大人(担当の指導者)とともに、行動上の制限のない状態で10分間置いた。

同室する母親および大人(要求充足者:以下,充足者)には、事前に対象児の自発的な働きかけを待ち、退室以外のすべての要求に応じるように教示した。特に、対象児に対する充足者からの指示的促しの言動、あるいは禁止的言動は一切しないことを教示した。また、対象児から棚上にある菓子類に対する要求があった時には、1回に付き、箱(袋)から1個および1口程度の分量を取り出し、与えることを事前に指示した。

観察セッションは、各対象児ごとに週1回で、計2回行った。

### 記録法および結果の整理

室内に設置された2台のビデオカメラによって録画されたVTRをもとに、対象児の全行動を転記し、それを基に分類し、整理した。

結果は、充足者および棚の対象物に関連する行動のみについて位置と行動型によって分類し、1つの行動型から他の行動型への移行時を区切りとし、各行動型の生起頻度を算出した。

同時に生起する行動群および行動の連鎖の内、約3秒以内に生起した行動群を1単位として分類し、その行動群に充足者に関連した行動型を含むものを「人へのアプローチ」群、充足者には関連せず対象物に関連した行動型を含むものを「対象物へのアプローチ」群としてカテゴリー化した。

なお、結果は2セッションの合計頻度によって分析した。

## 結 果

表2は、各被験児について観察された行動について先に述べた整理法に基づいて分類したものである。

縦軸は被験児ごとの棚の対象物と充足者に関連した行動項目で、横軸は対象物に関連した行動項目と充足者に関連した行動項目とに分け、さらにそれぞれ距離と方向に基づいて分類したもので、各項目に相当する行動の生起頻度を集計した。

即ち、「対象物へのアプローチ」に分類された行動には充足者に関連した行動は一切含まれていないが、「人へのアプローチ」に分類された行動には、1つは充足者への直接的アプローチのみの行動と、そしてもう1つは充足者に関連した行動と棚に関連した行動とが同時あるいは一連の行動として生起したものがあり、その両方が含まれている。

図2は、上記の集計表をもとに各被験児の行動項目毎の生起頻度を図示したものである。

#### (1) M児の結果

本児の要求行動についての母親からの聴取では(表1)、「ことばはなく、明らかな要求行動は少なく、要求頻度も少ない」とのことであったが、図2のプロフィールはそれをよく反映している。

「人への注視」「対象物への注視」以外に全体の行動の頻度は低く、対象物への行動も「人へのアプローチ」と共に生起する行動の頻度は低く、また、明瞭な要求行動も見あたらなかった。

更に詳細に検討すると、棚の側での「対象物への注視」「人への注視」「棚に手を掛ける」行動や充足者の側での「人への注視」「人に触れて立つ」行動の頻度が多かった。具体的には、棚に手や足を掛け、じっと10秒以上も対象物や充足者を注視したり、充足者の側に立ち、じっと同じく10秒以上もみつめる行動が多く観察された。また、棚の側から充足者を注視し、それから充足者に接近する、あるいは棚を見上げ、それから充足者を注視しながら充足者に接近するなどの行動が観察された。

しかし、それ以上積極的に棚へ誘導するような行動は見られず、また、充足者が棚で対象物を指さし、たずねなどの働きかけに対しても、ただ棚をじっと見上げるだけで、要求物を特定化する具体的行動は見られなかった。

発声行動は、主として棚および充足者への接近時や他の動作と共に観察された。

#### (2) S児の結果

母親からの報告(表1)では「いくつかの単語を有し、要求時に1語文で要求できるものがあるが、要求頻度は少ない」とのことであった。全体のプロフィールを図で見ると、全体として欲求・要求に関連した行動の頻度は高くはなく、発語要求は観察されず、発声行動も人に関連したものは少なかった。

また、「手指し」要求は生起したが頻度は高くなく、「人への注視」が多く観察された。

詳細には、「人への注視」行動はその約42%が「棚への接近」時と「棚に手を掛ける」「棚の前に立つ」あるいは「立の下に入って立つ」という行動と共に観察され、「対象物への注視」も充足者を見て棚を見上げる、あるいは棚を見上げて充足者を見るなど、その半数は「人への注視」に連続して観察された。また、「人への注視」は5～15秒間充足者をじっと見つめるという行動であった。

また、充足者が棚の前で「どれ」とたずねると棚に手を差し伸べ対象物を特定化する「手差し」行動が見られたが、この行動は1セッション目では観察されなかった。

特徴として、「人への接近」行動は観察されず、要求物の受け取り時以外の充足者に対する直接的行動は観察されなかった。

「発声行動」は「棚への接近」時および「棚を見る行動」と共に観察され、「アーアー」「ソー」

表2 各被験児の要求行動に関連する反応型とその頻度

対象児	(行動項目)	対象物へのアプローチ					人へのアプローチ						合計	
		遠距離	棚への接近	棚の側	その他	小計	遠距離	接近		棚の側	人の側	その他		小計
								棚へ	人へ					
M 児	人への注視								5	9	18		32	32
	発声	1	2	2		5			3		1		4	9
	対象物への注視	1	3	23		27			2				2	29
	棚に手を掛ける			8		8				2			2	10
	棚に足を掛ける			3		3								3
	飛び跳ねる			1		1				1	1		2	3
	人に触れて立つ										5		5	5
	人の膝に乗る										1		1	1
	手を差し出す										1		1	1
S 児	手差し									6			6	6
	人への注視						2	7		9		1	19	19
	発声		2	2	1	5		1		1			2	7
	対象物への注視		2	6		8		1		7			8	16
	棚に手を掛ける									1			1	1
	棚の下に入り立つ				1	1				1			1	2
	棚の下に入り座る				2	2				1			1	3
I 児	人の腕を取り、連れて行く										4		4	4
	人の腕を押し上げる									3			3	3
	人への注視						14	5	1	23	4	2	49	49
	発声													
	対象物への注視	1	7	6	5	19	5	2	6	16	3	2	34	53
	棚に手を掛ける			3		3				6			6	9
	背伸びする									1			1	1
	棚に足を掛ける									1			1	1
	棚に手を伸ばす									4			4	4
	足を挙げる			1		1				1			1	2
	横飛びで部屋を回る				2	2						1	1	3
	座る		1			1	5	1					6	7
	寝ころぶ						1						1	1
	棚から離れる									4			4	4
後ずさる				3	3				5			5	8	
棚以外の場所に行く											1	1	1	

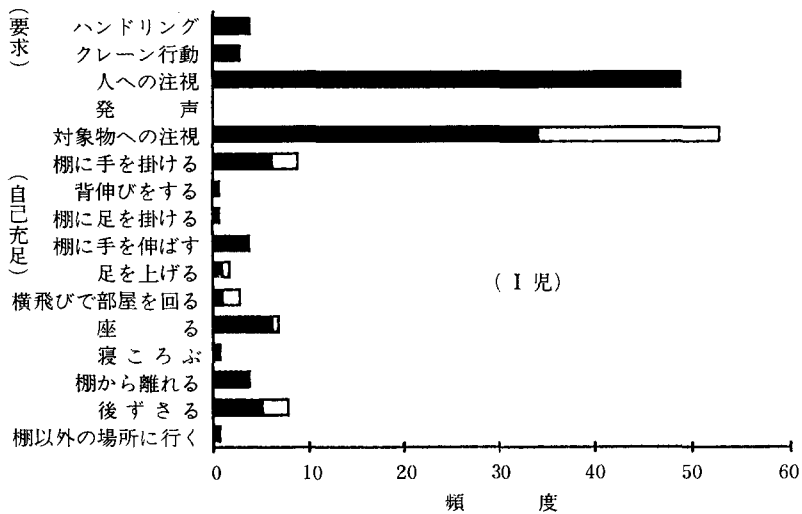
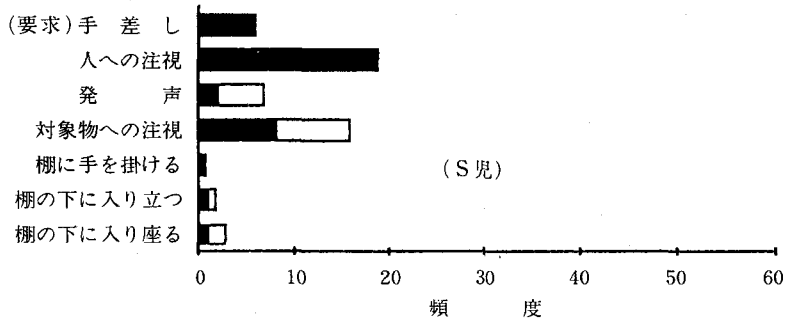
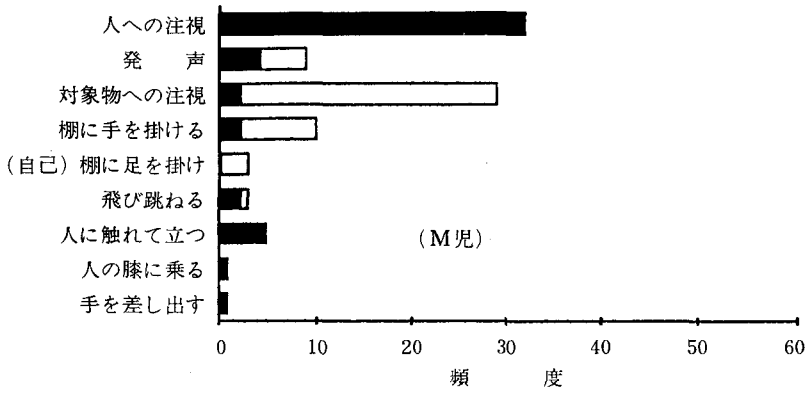


図2 各被験児の要求関連行動のプロフィール

など伝達の意図は不明であった。

### (3) I児の結果

母親の報告(表1)では、「いくつか単語を有するが、機能的な使用は困難で、明瞭な要求行動は少なく、時にハンドリングが見られる」とのことであった。全体のプロフィール(図2)をみると、「ハンドリング」「クレーン行動」といった明確な要求行動や「自己充足行動」の他、かなり多様な行動が見られたが、それぞれ頻度は低く、やはり先の2児と同じく「人への注視」と「対象物への注視」が高い頻度で観察された。しかも「対象物への注視」やその他の行動の多くが充足者に関連した行動と共に生じた。また、発声行動は見られなかった。

表2を見ると、「対象物への注視」や「人への注視」は互いに前後する一連の行動連鎖において多く観察され、また、「人への注視」は、その他のほとんどの行動型と同時かあるいは連鎖して観察された。

本児の特徴的行動として、充足者の棚への接近や本児への接近に対して充足者や棚を見上げながら後ずさる行動や離れる行動が多く観察された(12回)。また、棚や充足者を見ながら横とびして部屋を回る行動や、棚や充足者に接近するが途中で立ち止まったり、座り込んで充足者と棚を交互に見つめる行動がかなりの頻度で見られた。

また、ハンドリングは1セッション後半から生じたが、充足者に近づき袖口を掴むように持って棚へ連れて行くという行動で、そのあと充足者の腕を押し上げ要求物を特定化するクレーン行動が連続して観察された。しかし、2セッション目にはそれらの行動は全く観察されなかった。

## 考 察

### 欲求・要求に関連した自発的行動の特徴

本実験の結果を見ると、いずれの被験児も棚の対象物を見るという「対象物への注視」がかなり高い頻度で観察されている。これはやはり、先に行った研究(藤原, 1985<sup>(2)</sup>; 藤原・加藤, 1985<sup>(3)</sup>)によって確認されている「自己充足困難事態」の効果によると考えられ、したがって、棚の対象物への欲求を反映した行動であろうと思われる。

また、充足者を見るという「人への注視」行動が全ての被験児に同様に高い頻度で観察され、しかもその多くが先の「対象物への注視」と関連して生起している。即ち、棚に手を掛けじつと充足者の方を見たり、棚を見上げた後に充足者に近づくといった行動など、「対象物への注視」と「人への注視」が前後して連鎖するか、あるいは同時に繰り返し生起している。

これは、先に述べたように「対象物への注視」が対象物への欲求行動と捉えられるならば、この「人への注視」はその欲求を充足者へ伝達しようとする行動かあるいはそれに近い行動と考えられる。

したがって、これらの「人への注視」と「対象物への注視」という一連の行動は機能的に見て要求行動が、あるいはその萌芽的行動と見なすことが出来ると思われる。

しかし、それ以上の直接的で明確な欲求・要求につながる行動となるとI児のハンドリングとそれに続くクレーン行動以外には見られず、しかもそれは1度きりで、その手を取る行動も充足者の袖を掴むように持って連れて行くといった弱いものであった。

また、伝達行動の一部として重要だと思われる充足者への接近行動について見ると、被験児に依じて特徴的な傾向が見られる。

即ち、I児では、1回のハンドリングとそれに伴う接近以外は、充足者に向かって接近するが途中で立ち止まったままその場で座り込んで充足者や棚を注視するなど、間接的なアプローチに終始した。また、M児では対象物や充足者への注視と共に充足者への接近行動が見られたが、ただ充足者の側でじっと見つめて立つか触れて立つのみで、それ以上の積極的なアプローチは一切見られていない。そして、S児では、ただ棚の側に立ってそこから充足者を見つめるのみで、充足者への接近行動は一切観察されていない。

さらに発声行動と欲求・要求との関連性は、本実験の分析ではすべての被験児で見出せず、充足者に対する機能的な役割を全く果たしてしなないと思われた。

このようにいずれの被験児も、人の注意をしっかりと喚起し自己の欲求を確実に伝えることができるような自発的要求行動はほとんど、あるいは安定して獲得していないことが推察される。そして、現在の被験児の主要な自発的要求行動は対象物や人への一連の注視行動であることが示唆される。

#### 欲求・要求に関連した応答行動

次に充足者からの働きかけに対する応答行動という面から見ると各被験児とも傾向が異なり、欲求・要求に関連すると考えられる応答行動が観察されたのはS児のみで他の被験児では見られなかった。

即ち、S児では「どれ」とたずねられると手差しによって対象物を特定化する行動が見られたのに対して、M児では、充足者の働きかけに対してもただじっと棚を見上げて立つばかりでそれ以上の応答行動は見られず、I児では、逆に、充足者が接近すると棚を見ながら後ずさる行動や棚や充足者を注視しながら横飛びで部屋を飛び回るといった、回避を伺わせるような行動が多く見られている。

これらの差は、1つには被験児の能力レベルに関連していると思われる。津守式発達検査の結果(表1)を見ると、3人の被験児の中でもっとも言語レベル、発達レベルとも高いのはS児で、何れの領域も3歳以上の発達段階を示しているのに対して、他の被験児ではほぼ1歳レベルかそれ以下とS児に比べて全体的にかなり低い発達段階に位置している。そして、指差しや手差しのような定位性を持って対象物を的確に特定化するという行動は、機能的にはかなり高度な難度の高い行動であると思われる。したがって、一般にはある程度の発達段階を経て出現する行動と見なされ、前言語的行動として重要視されている。

こうしたことから推察するに、M児、I児で見られた欲求・要求的応答行動の欠如および意図不明の行動は、どのように応答してよいか分からないために同じ行動を繰り返すか、あるいは回りの者にとって意図を解しかねるような常同的行動を示したものと思われる。即ち、適切な応答行動の未学習の状態にあると考えられる。

しかし、ハンドリング等の自発的要求行動がI児で見られS児では見られなかったことは発達レベルからすると一見矛盾する結果である。S児の日常場面でのプロフィール(表1)から見て考えられることは、本実験では観察されなかったが、日常生活場面では頻度は低い既に1語文による要求もあり、また物の操作性や運動性も高いために自己充足がかなり可能なことが多く、実際には困ることが少ないのではないかと想像される。もしそうであるならば、はっき



りと他者の注意を喚起し欲求を伝える機会に乏しく、またハンドリングのような直接的な要求行動に対するニードに乏しいことが考えられる。その他、母親を中心とする養育者が本児の要求をその場の文脈や態度から捉え、促しの働きかけに対して応答するというパターンが成立しているのかも知れない。いわゆる自発性の欠如という状態である。

しかし、この問題に関しては本実験の分析からは明確な推察は困難であった。

### 要求行動としての機能性および機能化

本実験の3人の被験児は、いずれも日常生活中では欲求・要求の頻度が低くその表現にも乏しいと報告されている。しかし、既に述べたように本実験事態（自己充足困難事態）では、その程度に個人差はあるが、注視行動を中心とした対象物への欲求行動と見られる行動がいずれの被験児においてもかなり高い頻度で観察されている。これは、一見、欲求・要求に乏しいと見られる子ども達であっても、実際にはかなりはっきりした欲求をもっている可能性を示唆するものである。しかし、それを顕在化するためにはここでの自己充足困難事態のような要求対象物の物理的統制か動因操作が必要なのであろう。

次にその欲求を伝える手段であるが、手差し、ハンドリング、クレーン行動といった要求行動が確認されたが、それらはいずれも安定したものではなく、各被験児とも、確実に他者の注意を喚起し要求対象物を特定化できるような明瞭な反応型は未確立の状態にあると思われる。そして、対象物と人への一連の注視行動といった消極的で間接的な反応型がその主要な要求表現であることが示唆された。

したがって、実際には充足者が注意深く子どもの行動を観察しその伝達意図を察しなければ、これらの一連の注視行動は要求行動として機能を果し得ないであろうと思われる。

以上の結果から、欲求・要求表現が微弱で不確実な遅滞児にあっては、充足者が遅滞児の対象物への注視や人への注視に留意し確実に対応することが、要求行動を獲得させるための重要なステップであろうと思われる。しかも、これらの遅滞児にあっては、その対応も子どもに向かって積極的に欲求や要求表現を促すことはかえって不用な混乱と充足者に対する回避傾向を生み出す場合があることを本実験の結果は示唆している。

藤原(1985)<sup>(2)</sup>は、豊富なことばを持ちながら自発的機能的な要求言語行動に乏しい自閉症児の分析から、要求言語行動を確立するためにはまず、「子どもの欲求行動を他者が的確に捉え、即時に対応する」という受容の充足体験を十分に経ることが重要であることを指摘している。そこで、欲求・要求表現が微弱で不確実な重い遅滞児にあっては、注視を中心とした微弱な欲求・要求表現に対して、それ以外の特定の表現を促すのではなく、まず充足者が即座に欲求対象物を提示するという「即時対応」による受容の充足過程を十分に体験することが必要なのではないかと考える。おそらくその過程を通じて、自己の欲求が他者への接近行動といった人に対する直接的なアプローチに結び付いてゆくのであろう。

しかる後に、さらに確実に人の注意を喚起し欲求を伝達し要求対象物を特定化できる行動型が獲得されるか、あるいはそうした行動に対するニードと学習の機会が保証されるのではないかとと思われる。その際には、その子どもの現在の行動レベルに即して形成すべきなのであろう。

## 引用文献

- (1) Berger, J. & Cunningham, C. C. 1983 Early social interactions between infants with Down's syndrome and their parents. *Health Visit*, **56**, 58-60.
- (2) 藤原義博 1985 自閉症児の要求言語行動の形成に関する研究 特殊教育学研究, **23**.3, 47-53
- (3) 藤原義博・加藤哲文 1985 重度言語遅滞児の要求言語行動における反応選択 発達障害研究, **7**, 42-51
- (4) 高杉弘之 1985 障害児の信号系活動と初期学習 発達障害研究, **6**, 195-201
- (5) Winokur, S. 1976 *A primer of verbal behavior: An operant view*. 佐久間 徹・久野能弘 監訳(1984): スキナーの言語行動理論入門 ナカニシヤ出版

## Analysis of Feeble Mand in Severely Language-Delayed Children

Yoshihiro FUJIWARA

### ABSTRACT

The objective of this study was to find the factor which early shaped a mand in severely language-delayed child who was poor in functional language skills.

Three severely retarded children were observed to analyze topographies of their poor and feeble mands. In the experimental setting, child's favorite objects were placed in view out of reach on a shelf and the mother or instructor, as the reinforcement mediator, stood beside the shelf.

As a result, some topographies of mand, such as handling, crane behavior, and pointing with hand, were observed but occurred rarely and they were not functioning to specify child's desired objects. On the other hand, gazing behavior at the mediator or object were observed frequently and it appeared to be functionally a mand.

Finding suggested that using the same setting in this investigation, the retarded child of poor mand would obviously show his wants and that gazing behavior, which was negative and indirective response, was mainly used as a mand in such retarded child.

Mediator's response to feeble mand was discussed with regard of the procedure to establish a mand more early.